

# TOMMYKAIRA

後トミーカイラジャパン ☎0565-52-8555 <http://www.tommykaira.com>

## NISSAN GT-R

東京オートサロン2010でお披露目されたR35。新生トミーカイラのフラッグシップとして葦たつくりとなっており、FRP+ウエットカーボン製のほか、フルFRPの2タイプを設定する上に、ビルドアップが楽しめるよう部品点数も多いのが特徴。また、MY2011用の製作も決定。ディフューザー部の適合だけではなく、細部デザインがアップデートされる可能性もあるとか。



「デザインや機能による高級感や満足感の提供だけじゃなく、アフターサービスもふくめたブランド価値を提案したいんです」



トミーカイラ 樋井サン

## LED Day Light

こちらは東京オートサロン2011で発表したLEDディライト。トミーカイラはLEDパーツも多数リリースしているが、すべて車種専用設計のボディパーツであるというのがこだわりで、R35用としてはエンブレムやスカッフプレート、リヤサイドマーカーなどをラインアップする。



## CONCEPT コンプリートの方向性と マッチするスタイリング

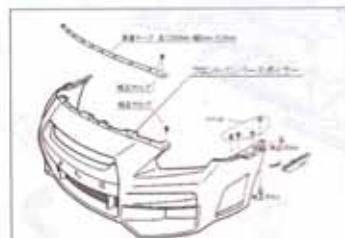
そもそも、トミーカイラをエアロメーカーと規定するのはむずかしい。パーツ単体販売を積極的に行っているとはいえず、現在も変わらずコンプリートカーメーカーであり、ボディキットのみならず車高調やマフラーといったチューニングパーツもリリース。車種によってはエンジンチューンも展開している。

「ですが、ボディパーツに対するこだわりはもっとも強いでしょうね。エアロはトミーカイラであることを視覚的にアピールできるパーツです。それは、機能パーツの存在もふくめた記号といえますから」とは代表の樋井桑のコメント。

「エアロデザインは方向性としてコンプリートカーとしてのパッケージングで打ち出しているワケだ。同社の車高調やマフラーがそうであるように、乗り手を選ぶような過激さはないが、だれもが満足する高性能と高品位をボディキットとして提供するものである。

「サーキットでコンマ1秒を競うためのエアロじゃない。あくまでターゲットはストリートで気持ちよく走ること。そして、眺めるたびに愛車をほころしく思えるステータスをあたえることがコンセプトなんです」とは樋井桑。ある意味で使用環境やユーザーを限定することによって、ねらうべき機能をしぼりこむことができるのだ。

09年6月より新体制を敷いたトミーカイラが、そのフラッグシップとして手がけたファーストモデルがR35 GT-Rだ。デザインは旧体制時代から手がけていたデザイナーによるものだが、品質もふくめて現在のトミーカイラの個性が色濃く反映されている。



エアロデザイン同様、取付説明書に際してもプロのイラストレーターに委託し、詳細なイラストでわかりやすく解説される。日本語のみの記載であるが、このイラストによって海外のショップからもわかりやすいと好評を得ているそうだ。ブランド力を確立するためにトミーカイラが心がけているポイントである。

立ち会いのもとに細部を煮詰めていく...という流れで、コスト管理もふくめて自らの責任で進行しているという。いっぽう機能面では、まずクルマのオリジナリティを理解するところからはじまり、自社メカニクの見解も採り入れてデザインしていくそうだ。たとえば、R35ではリヤアンダーディフューザーをスポイラーと別体として、より後方へと延長させていることがポイント。これによってダウンフォースを獲得し、さらに空気抵抗と風切

も前提として重要になるフィットティング性に対するこだわりも並大抵のものではない。とくに、旧体制時代の製品で型が劣化してきたものは、修正

の一流ブランド品がそうであるように、トミーカイラがめざすエアロデザインとは高機能に裏づけられたものである。さらに、イラストによる取扱説明書のわかりやすさも世界で評価されるポイント。デザインや機能にこだわって、アフターサービスまでもユーザーに絶対の満足を提供することが、トミーカイラのこだわりである。

流行を採り入れられないのではなく、キツリとトミーカイラのテイストとして消化し、クルマにマッチングするよう考慮。そのため、現在のエアロデザインは、まずスケッチを樋井井サンが描き、それを専属のデザイナーがクリンアップ。さらに、造形時も樋井井サン



まもなくリリースされるBM / BRレガシイ用フロントバンパーボイラーのイラスト。ちなみに、これは決定稿ではなくボツ案のうちのひとつである。エアロデザイナーにイメージを伝えるために樋井井サンが複数枚のイラストを描き、そのなかからいくつかをクリンアップされる。また、樋井井サンはデザインの決定後も造形の現場でデザイン指示と細部チェックをするなど、ブランド管理を徹底して行っている。

素材についてはBE B Hレガシイでウレタン製バンパーを採用したこともあったが、現在はFRP製をベースとして要所にウエットカーボンを採用する手法に一本化。これは、コストと品質のバランスを追求した結果である。カーボン部もあえてウエットを選択しているのは、前述のとおりトミーカイラ製エアロはストリートでの優位性をテーマとしているから。エアロに極限の性能を求めるならトライカーボンはたしかに魅力だが、クオリティを維持しやすくコストパフォーマンスにすぐれるウエットカーボンを採用したワケだ。

修正のプロアパネルと結合するように設計されたリヤレーシングディフューザー。リヤアンダースポイラーとも別体とすることで、トランクにこもりやすい積熱を逃がすアウトレットをデザインに統合。また、ディフューザーを大型化するとともに角度を立ちあげ、さらにバーチャルフィンも大型化することでフロア下の整流効果を高めている。



## TECHNICAL クルマの特性にあわせた 機能デザインを追求する

トミーカイラ製エアロを語る上でポイントになるのは、やりすぎない、ということ。とくにデザイン面では、流行を前面に出しすぎないことに気をつけている。流行は旬が過ぎれば一気に古いものとなってしまっからだ。

それは、見た瞬間にトミーカイラだとわかるアイデンティティだ。機能美というものはすこしちがう。ファッション性のなかにある機能性。世界

り音の低減を実現するとともに、車体下部の整流効果向上にもなる空気量の増加によって、トランスアクスルの冷却やマフラーの排熱効果もねらっているのだ。

フロント以上にリヤスタイルにこだわるのもトミーカイラ流。ノーマルのR35は、リヤにポリウム感があるわりにのっぺりとした印象だが、アンダースポイラーのサイドダクトやオーバーエンダーによってイメージが刷新される。また、サイドステップに関しては乗降性をやや犠牲にしても、意図的に低く設計して視覚的なトータルバランスを追求。



# 高機能と高品位に裏づけられたデザイン クルマに存在感とステータスをあたえる

## LINE UP



**A4 AVANT S-LINE (8K)**  
トミーカイラの派生ブランドとして欧州車向けとなる「ROWEN (ローエン)」もスタートした。アウディはA4 / S4、A5、TT用をリリース。また、現在はBMW Z4用の開発も進められている。



**LEGACY TOURING WAGON (BR9)**  
名古屋オートトレンド2011で発表されたバンパーボイラー。新生トミーカイラのアイデンティティが見て取れるが、レガシイのフロントマスクにあわせて各部のエッジが強調されたデザインとなっている。



**PRIUS RR-GT (ZVW30)**  
インサイトとともにハイブリッドカー専用パーツラインナップにも力が注がれる。このRR-GTはハーフスポイラーにつづくプリウス用エアロ専用となるバンパーボイラー。R35用の歴史を受けつぎつつ、いち早くLEDディランブがインストールされた。



**LEGACY B4 (BM9)**  
レガシイは世代に対してコンプリートカーを設定してきた。トミーカイラにとって重要な車種。新生トミーカイラでも変わらず継承しているが、こちらは過去に例がなかったハーフスポイラーのチャレンジモデルだ。